

シップ・オブ・ザ・イヤー2023 選考経緯

選考委員会には 11 名の委員が出席した。欠席した平野委員からは、各応募船の評価を文書でいただき、選考時の投票に加えた。

まず、応募時に提出された各船の資料、プレゼンテーションの内容等について、臨席していた予備審査委員会の委員の意見も聞きながら意見交換が行われた。その後、各委員がシップ・オブ・ザ・イヤーに相応しいと思う船を 1~2 隻程度、その推薦理由も説明しながら挙げた。その結果「ONE INNOVATION/ONE INFINITY」が 8 票、「大島丸」が 4 票、「えくすくうる」が 3 票、「國喜 68」が 2 票を獲得した。

この結果、「ONE INNOVATION/ONE INFINITY」を全会一致でシップ・オブ・ザ・イヤー2023 に選出することを決めた。超大型コンテナ船の建造では、先行されていた韓国、中国に対抗すべく日本の 2 大造船企業がタッグ（コンソーシアム）を組み、両社の技術力を結集させ、国内 3 ケ所の工場で、24,000 個積みという世界最大級のコンテナ船を約半年という短期間に 6 隻建造したことが高く評価された。また同船型には、新しい造船技術が多く取り込まれており、なかでも風による抵抗増加を減らすと同時にコンテナ積み個数を増加させた新船首風防は新規性が高いと評価された。

船舶技術者からなる予備審査委員会から、小型貨物船部門に応募の「えくすくうる」にシップ・オブ・ザ・イヤー技術大賞を与えることが報告された。同船は、液化 CO2 輸送における各種データが取得できる試験船という役割と、実用的な LPG 輸送船を兼ねた船で、将来的な大型船による CO2 海上輸送の実現に向けた貴重な技術知見が得られるものと期待され、話題性・社会へのアピール度は高く、日本の造船業の新事業にもつながる可能性が高いと評価された。

次に各部門賞の選考に移った。

まず小型客船の部の「あいしま」については、在来型貨客船である被代替船に比べて大型化を図り、RORO 型にして車を積載できるようになり、車で島に釣りに出かける新しい需要、商店のない島への移動販売車の定期的な輸送、バキュームカーなどの利用が進んだ。またすいかの一大産地である相島に相応しい外観デザインを、プロジェクトマッピングを用いて評価する手法で決定したこと、垂直船首、フィンスタビライザー等を採用して省エネ化、乗り心地の向上を図ったことが評価された。

次に小型貨物船の部の「國喜 68」は、内航船の進化を目指す目的で設立された一般社団法人内航未来研究会を中心として、運航、離着桟、荷役、停泊時の全モードにおける省エネ化を統合的に行い、次世代型内航貨物船として完成させたことが高く評価された。

漁船・調査船の部の「大島丸」は、バッテリーハイブリッド電気推進システム、ゲートラダーを搭載するなどの、練習船としての革新性と、乗船する学生の勉学環境と同時に快適性の確保、さらに地域に船員教育の重要性を広く知らうために、船飾照明等を行うなどして、積極的に情報発信する姿勢が高く評価された。

選考委員長 池田 良穂